

アジア・アフリカ学術基盤形成事業 平成22年度 実施報告書

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立民族学博物館
(マリ)側拠点機関：	マリ文化省文化財保護局
() 拠点機関：	

2. 研究交流課題名

(和文)： アフリカにおける文化遺産の保護と社会的活用のための研究交流
(交流分野：文化財科学)

(英文)： Protection and Public Use of the Cultural Heritage in Africa
(交流分野：)

研究交流課題に係るホームページ：<http://www.r.minpaku.ac.jp/takezawa/>

3. 開始年度

平成22年度 (1年目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立民族学博物館

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：館長 須藤健一

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：民族文化研究部 教授 竹沢尚一郎

協力機関：南山大学

事務組織：国立民族学博物館 研究協力課国際協力係および財務課経理係

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国(地域)名：マリ

拠点機関：(英文) Direction of the Cultural Heritage, Ministry of Culture

(和文) マリ文化省文化財保護局

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：(英文) Director・Sanogo Klessigue

協力機関：(英文) University of Mali

(和文) マリ大学

5. 全期間を通じた研究交流目標

ユネスコによる世界遺産の制度化により、アフリカ諸国の文化遺産に関する関心はいちじるしく高まっている。しかしながら、世界遺産に登録されている総件数890（2007年現在）に対し、サハラ砂漠以南のアフリカ諸国の登録件数79、うち文化遺産42と、その数はきわめてかぎられている。その理由は、ひとつには、アフリカ諸国の考古学調査が進んでいないために、文化遺産の価値が十分に認識されていないことである。それに加えて、アフリカの多くの国では、文化財の保護や社会的活用のための制度設計ができていないという課題もある。

本学術基盤形成事業においては、西アフリカ・マリ共和国の文化省文化財保護局およびマリ大学と協力しながら、文化財の発掘・調査に当たる人材の育成と、文化財の保護および社会的活用に関する人材を育成する。マリのように深い歴史がありながら、研究学術資金の制約がある国家においては、この2つの領域は同一人物が兼務していることが多く、この両面における力量の啓発は大きな意義がある。さらに、文化財の保護とその社会的活用のために地域社会とどのように協力するかのノウハウを概念化し、博物館などでの展示・公開の作業を通じて、文化財のもつ価値を地域住民と国民に対して公けにしていって作業を実施することで、文化財の公共的活用という研究課題に応えていく。また、本研究期間中に、わが国の若手研究者を現地で研究させるなどして、彼らの育成にも尽力する予定である。

6. 平成22年度研究交流目標

本年度は、本研究の日本側コーディネーターである竹沢がまずマリに行き、マリ側コーディネーター等と、今後の研究交流の実施計画の策定、マリ大学との研究協力の実施体制の構築について話し合う。それと平行して、日本では日本側参加者が数回集まって協議して「研究協力体制」を構築する。また、これまでネットワークの存在しなかったガーナともネットワークを広げるために、マリ出張時にガーナに立ち寄り、アクラ・ガーナ大学やンクルマ・クマシ大学の考古学者や文化財科学者と協議する。

「学術的」には、本研究協力によってマリ国内の考古学者と共同研究を組織して、未開発の遺跡の発掘を行う。それと平行して、マリの考古学的研究の発展に寄与するべくセミナーと実習を組織し、文化財の保護のためのノウハウの開発と、考古学的知識の普及・開拓に貢献する。これらは、マリ大学の大学院生や若手の学芸員の学識と技能の向上に大きく寄与するはずである。

7. 平成22年度研究交流成果

7-1 研究協力体制の構築状況

本年度は、まず6月に日本側コーディネーターである竹沢が、マリおよびマリと歴史的関係の深いガーナに行き、相手側機関であるマリ文化省文化財保護局とクマシ大学の研究者と会って、本事業の具体的な進め方について協議した。マリとの研究交流は、

竹沢が30年近く以前から実施してきたものであるが、ガーナとの研究交流を実施したのは今回が最初であり、今後の交流の緊密化に向けて大きな成果が得られた。

7-2 学術面の成果

平成22年12月から翌23年2月にかけて、マリ東部のガオ地区で実施した発掘調査により、従来西暦10世紀に作られた2棟の建造物からなると思われていたこの遺跡に新たな建造物を発見した。この建造物は、他の建造物と同時代である他、建築技法もおなじであることを確認した。また、それより後代の建造物が、3層にわたって形成されていることも明らかになった。これらの建造物の形成過程についてはほぼ分析が終わっているが、西アフリカで複数の層にわたる建造物の形成過程が明らかにされたのは初めてである。

出土品としては、サハラ交易の証拠というべきガラス製ビーズが1万5千点出土しているほか、北アフリカ産の陶器、ガラス器が数千点出土している。これにより、西暦10世紀という早い時期に、さまざまな地方と交易がおこなわれていたことが明らかになった。

7-3 若手研究者養成

平成22年12月と翌1月に、2名の日本人大学院生をマリでの発掘調査に参加させることで、若手研究者の育成につとめた。日本では、サハラ以南アフリカの考古学を専門とする考古学者はいまだ存在せず、その意味では意義のあることである。

平成23年度1月には、バマコ大学の大学院生4名を2週間にわたって、考古学発掘の研修に参加させた。バマコ大学では、毎年約40名が歴史学・考古学の専門課程に進学するが、予算の不足によりかれらを対象とした研修は実施されていない。その意味では大きな意義のあるものである。

7-4 社会貢献

社会的貢献に関しては、まだ手をつけるまでにはならず、今後の課題である。

7-5 今後の課題・問題点

当初の計画では、マリ側協力機関と共同で、マリ全国の博物館の学芸員を集めてセミナーを実施する予定であった。しかし、これはマリ側の準備不足により、マリ側受け入れ機関の専門員だけを集めて行うセミナーによって代替した。翌年度に、当初の計画通りにセミナーを実施する予定である。

他方、共同研究や研究交流については着実に成果を上げており、若手研究者の育成に関しても大きな実績を挙げているので、継続していく。

7-6 本研究交流事業により発表された論文

平成22年度論文総数 0本

本事業名が明記されている論文 0本

相手国参加研究者との共著 0本

8. 平成22年度研究交流実績概要

8-1 共同研究

本学術交流事業の日本側コーディネーターである竹沢尚一郎が、マリ側コーディネーターのクレシゲ・サノゴ、マリ側協力機関に所属するダウダ・ケイタ、ママダイ・ダンベレとともに、マリ東部のガオで約1ヶ月半にわたり考古学の発掘調査を実施した。これは西アフリカ最古の王宮と思われる大規模建造物の発掘であり、アメリカのイェール大学からモノグラフの出版のプロポーザルを受けるなど、世界的に注目されているものである。またこの発掘調査には、日本の大学院生2名、マリのバマコ大学の大学院生4名が参加して、研修を実施した。

8-2 セミナー

平成23年1月に、竹沢とサノゴ、ケイタの3名が、マリ文化省文化財保護局に勤務する8名の専門職員を対象に、マリ国内の土器の分布や編年、製作方法等についての基礎的知識を付与するためのセミナーを実施した。使用した土器は、日本側コーディネーターである竹沢らがマリ国内で実施した考古学発掘によって得られたものである。マリ国内の考古学遺跡の分布、発掘調査の歴史、マリの土器の編年や分布、制作方法等について講義及び実習を実施した。彼らの多くは、これまでマリ国内の考古遺跡の分布や土器の編年等についての具体的知識を得るための研修を受けたことがなく、本セミナーによって初めてそれを得られたと語る人間も多かった。こうしたセミナーにより得られた知識は、マリ国内の考古資料の保存だけでなく、遺跡の分布調査などにも活用されるはずである。

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

平成22年6月から7月にかけて、竹沢がマリとガーナに行き、研究者交流を実施した。マリでは、マリ文化財保護局と今年度の共同研究やセミナーの実施に関して、詳細を詰めた。ガーナでは、首都クマシにあるクマシ大学で、今年度以降の共同研究の実施や研究交流について話し合った他、ガーナの考古学の現状について広く知見を得た。

9. 平成22年度研究交流実績人数・人日数

9-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元		日本	マリ	ガーナ	合計
		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	
日本 <人/人日>	実施計画		4 / 50	1 / 15	5 / 65
	実績		3 / 55	1 / 13	4 / 68
<人/人日>	実施計画				
	実績				
<人/人日>	実施計画				
	実績				
合計 <人/人日>	実施計画		4 / 50	1 / 15	5 / 65
	実績		3 / 55	1 / 13	4 / 68

9-2 国内での交流実績

実施計画	実 績
8 / 8<人/人日>	0 / 0<人/人日>

10. 平成22年度研究交流実績状況

10-1 共同研究

—研究課題ごとに作成してください。—

整理番号	R-1	研究開始年度	22年度	研究終了年度	24年度	
研究課題名	(和文) アフリカにおける文化遺産の保護と社会的活用のための共同研究					
	(英文) Protection and Public Use of the Cultural Heritage in Africa					
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 竹沢尚一郎・国立民族学博物館・教授					
	(英文) Takezawa Shoichiro, National Museum of Ethnology, Professor					
相手国側代表者 氏名・所属・職	Sanogo Klessigue, Direction of the Cultural Heritage, Director					
交流人数	① 相手国との交流					
(※日本側予算 によらない交流 についても、カ ッコ書きで記入 のこと。)	派遣先		日本	マリ	計	
	派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
	日本	実施計画		1 / 30		1 / 30
	<人/人日>	実績		1 / 44		1 / 44
		実施計画				
	<人/人日>	実績				
		実施計画				
	<人/人日>	実績				
	合計		1 / 30		1 / 30	
<人/人日>	実績		1 / 44		1 / 44	
② 国内での交流 人/人日						
22年度の研 究交流活動	竹沢が、マリ側の研究者であるサノゴ局長、ケイタ、ダンベレ両教授とともに、マリ東部のガオで考古学発掘調査を実施した。これに日本およびマリの大学院生（本研究課題の参加者外）を参加させることで、両国の考古学の発展に寄与した。					
研究交流活動 成果	従来発見されていた2軒の大規模建造物に加え、新たな大規模建造物を発見した。また、その上部に建てられている建造物の断片を掘り出し、この遺跡が3層ないし4層からなっていること、時代的には6世紀から15世紀にかけての遺跡であることが解明された。西アフリカで、時代を越えて建設された複数の建造物の成層が明らかにされたのは初めてである。					
日本側参加者数						
1 名		(13-1 日本側参加者リストを参照)				
マリ側参加者数						
3 名		(13-2 マリ側参加者リストを参照)				

10-2 セミナー

—実施したセミナーごとに作成してください。—

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業・考古学調査と同資料分析のためのセミナー
	(英文) AA Science Platform Program, Seminar on Archeology in Mali
開催時期	平成23年1月14日 ~ 平成23年1月15日 (2日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) マリ、バマコ、文化財保護局
	(英文) Mali, Bamako, Direction of Cultural Heritage
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 竹沢尚一郎・国立民族学博物館・教授
	(英文) Takezawa Shoichiro, National Museum of Ethnology, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	クレシゲ・サノゴ・マリ文化財保護局・局長 Klessigue Sanogo, Direction of Cultural Heritage, Director

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (マリ)	
	A.	
日本 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	
	C.	
マリ 〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	2/4
〈人/人日〉	A.	
	B.	
	C.	
合計 〈人/人日〉	A.	1/5
	B.	
	C.	2/4

A. セミナー経費から負担

B. 共同研究・研究者交流から負担

C. 本事業経費から負担しない(参加研究者リストに記載されていない研究者は集計しないでください。)

セミナー開催の目的	マリ文化省文化財保護局に勤務する8名の専門職員を対象に、実際の土器を使用して、マリ国内の土器の分布や編年、製作方法等についての基礎的知識を付与する。使用する土器は、本学術基盤形成事業の日本側コーディネーターである竹沢を中心とするチームが、マリ国内で実施した考古学発掘によって得られたものである。マリ国内の考古学遺跡の分布、マリ国内における考古学調査の歴史、マリの土器の制作方法や編年について、外観と実践的な知識を付与することを目的とするものである。	
セミナーの成果	本セミナーは、マリ文化省文化財保護局の専門職員を対象として初めて行われた実地教育のためのセミナーであり、参加者にとって大きな意義を有したと考えられる。彼らの多くは、これまでマリ国内の考古遺跡の分布や土器の編年等についての具体的知識を持ち合わせておらず、本セミナーによって初めてそれを得られたと語る人間も多かった。このようなセミナーを継続して実施することによって得られた知識は、マリ国内の考古資料の保存だけでなく、遺跡の分布調査などにも活用されるはずである。	
セミナーの運営組織	マリ文化省文化財保護局のサノゴ局長をチーフとして、運営組織を形成した。	
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 旅費・滞在費 金額 450,000 円
	マリ側	内容 印刷費・資料代 金額 40,000 円
	() 国 (地域) 側	内容 金額

10-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

① 相手国との交流

派遣先		日本	マリ	ガーナ	計
派遣元		<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>	<人/人日>
日本 <人/人日>	実施計画		1 / 10	1 / 15	2 / 25
	実績		1 / 6	1 / 13	2 / 19
<人/人日>	実施計画				
	実績				
<人/人日>	実施計画				
	実績				
合計 <人/人日>	実施計画		1 / 10	1 / 15	2 / 25
	実績		1 / 6	1 / 13	2 / 19

② 国内での交流 人/人日

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣時期	用務・目的等
国立民族学博物館・教授 竹沢尚一郎	マリ・文化財保護局、ガーナ・クマシ大学	H22. 6. 23 ~ H22. 7. 11	マリ文化財保護局と、今年度の共同研究やセミナーの実施に関して、詳細を詰めた。クマシ大学では、今年度以降の共同研究の実施や研究交流について話し合った他、ガーナの考古学の現状について広く知見を得た。

1 1. 平成22年度経費使用総額

	経費内訳	金額 (円)	備考
研究交流経費	国内旅費	6,050	
	外国旅費	3,086,923	
	謝金	1,506,416	
	備品・消耗品購入費	0	
	その他経費	164,119	
	外国旅費・謝金に係る消費税	236,492	
	計	5,000,000	
委託手数料		500,000	
合 計		5,500,000	

1 2. 四半期毎の経費使用額及び交流実績

	経費使用額 (円)	交流人数<人/人日>
第1四半期	0	2/19
第2四半期	946,683	0/0
第3四半期	1,425,000	1/26
第4四半期	2,628,317	1/23
計	5,000,000	4/68